72

シーボルト記念館蔵の「阿蘭陀草花鏡図」とその背景について

ヴォルフガング・ミヒェル

長崎のシーボルト記念館の新しい収蔵品に「阿蘭陀草花鏡図」（彩色、タテ二八cm×ヨコ一三三七cm）がある。この巻き物には八一点の植物が水彩で描かれ、カタカナで西洋名（ロウザ、ヒヨウリス、メンテ、マルバ、カモメリ、カルモス等々）が記されている。それぞれの植物の絵の下に、四〇字から一五〇字程度の漢文の解説があり、植物の和名や、種蒔き、開花、薬としての利用などについて記されている。それから最後には以下の記述がある。

「右此一巻者阿蘭陀外科／草花見フランスフロム来朝之時／公方様ヨリ被仰付／草華之油取指上則此絵ヲ／相認申儀予仕上後世為／乎鑑自晝畢誠世稀也其／方外療数年被尽粉骨一／流依通達則准一子授與之／豈不可有可秘蔵可秘々々／延宝七年三月吉日」

ここにフランスフロムとして名の挙がっているフランス・ブラウン（Frans Braun）の派遣は、一六六七年一一月六日に、長崎奉行松平甚三郎と河野権右衛門を通じて商館長ダニエル・シックスに伝えられた「皇帝と帝国顧問官は、植物学と薬油蒸留に詳しい人物が日本へ派遣されることを望んでいる」との要請によるものだった。また、蒸留に必要な装置一式と「オランダの植物の種」と生きた薬用植物が注文された。一六六九年に日本にやって来た若い薬剤師ゴデフリート・ハーク（Godefried Haeck）は、蒸留装置を用意していなかった。数回に亘って長崎周辺で行われた薬草狩りでは、ハークは二五種類の有用植物を判定できたが、奉行や阿蘭陀通詞などが彼の専門知識を疑問視したこともあり、日本側が納得する成果を上げられなかった。そのため一六七一年夏、ハークに代わりフランス・ブラウンが着任した。ブラウンはドイツのローツェンブルク（Rotsenburgh）あるいはロールゼンブルク（Rolsenburgh）の出身で、蒸留装置の他に多くの薬草や植物の種を持参した。一六七一年一一月、出島の南西の一角に小屋（distileerhuisje）が建て

られ、蒸留装置が設置された。本木良永の「諸画絵図集」所収出島図に見られるこの「油取家」の建造費は日本側が負担し、蒸留装置は東インド会社が提供した。一六七二年春、ブラウンは数回にわたり、数々の薬油の蒸留を行ない、日本の医師たちに蒸留技術の説明を行なった。出島の阿蘭陀通詞により作成された報告書をもとにした一連の写本で、九種類の薬油に関する説明と精密な蒸留装置の絵が掲載されているものが現存している。ブラウンは油搾器も使用し肉豆蔻油を製造したが、楢林鎮山が残した「紅夷外科宗伝」などの資料に見られる油搾器の絵は、当時の状況を示していると思われる。

一六六九年、会社によりあらかじめ種と植物が日本へ送られており、商館長カンプホイスによるとこれらは「皇帝の庭」（keijsers tuijn）に蒔かれ、日本人庭師が世話をしていたという。この植物が日本の気候に耐えられたかどうか、資料からははっきりしない。ブラウンが一六七一年に持って来た他の種や植物の繁殖状態は悪かった。今日では現存しないが、東インド会社はこれに解説つき目録を添付していた。シーボルト記念館の「阿蘭陀草花鏡図」はこの目録か、ブラウンが数年間の出島滞在中に行なった指導のどちらかがもとになっている。

（九州大学大学院言語文化研究院）